

実習内のプレゼンテーションにおける学生相互評価の導入

山下晋平*1・松田睦実*1

(*1 宇部フロンティア大学短期大学部食物栄養学科)

Introduction of peer evaluation of students in presentations during practical training

Shinpei Yamashita*1, Mutsumi Matsuda*1

(*1 Department of Food and Nutrition, Ube Frontier College)

本研究では、栄養士養成施設における専門科目である栄養指導実習 I で行うプレゼンテーションにおいて学生相互評価の導入を試みた。実習内のプレゼンテーションに対して、相互評価のルーブリックを作成し、教員と学生が評価することとし学生同士で評価するにあたっては、学生同士で誰が誰を評価するのか明らかにした記名式学生相互評価と誰が誰を評価したのかが分からない無記名式学生相互評価を実施し、ルーブリック作成及び記名が評価に与える影響を調査した。

調査の結果、3つの視点ともに「良い(3点)」を中心に評価が分布していたことから、ルーブリックが学生の評価行動の標準化に効果があったと考えられた。記名の有無では、記名式学生評価で教員評価と比較し有意に高いという結果が得られた。そのため、評価行動の標準化にはルーブリックが重要であること、教員の評価に近づけるためには無記名式学生相互評価が有用であることが示唆された。

キーワード：相互評価、ルーブリック、プレゼンテーション、短大生
Keyword: peer-review, rubric, presentation, Junior College Students

1. 緒言

実習内で行うプレゼンテーションの評価は、担当教員1~2名程度で評価を行うの一般的である。しかし、プレゼンテーションは、与えられたテーマに対して問題点を適切にまとめられているかどうか(事前準備)、問題点に対する解決策を検討し最善策を考えられているか(内容)、そして分かりやすい発表方法(スキル)など、採点者の主観が入ってしまうことから採点者が多いほうが望ましいと考えられる。しかし栄養士養成校における教員配置の現状から1つの実習科目に教員を多く配置させることは難しい。実習内でのプレゼンテーションは他の学生も聞くことから、学生相互評価を導入することで採点者の増加が期待できる。

相互評価は、ピア評価、ピア・レビューとも呼ばれており、アクティブラーニングの実施方法の1つとされている。ピア・レビューとは他者の行動に対する何らかの反応のことであり、ある学習者の言動に対し反応があることで、その学習者は自分の言動に関するデータを得られ、そのことにより自分の言動を客観的に

把握でき、より高い目標へ進むことができる¹⁾とされている。

本研究では、実習内プレゼンテーションにおける学生相互評価に焦点をあてて、短大生を対象に効果的な実施方法を検討する基礎資料を得ることを目的に、相互評価のルーブリックを作成し記名式学生相互評価と無記名式学生相互評価を行い、それぞれの結果を比較・考察を行った。

2. 方法

2.1. 調査対象

食物栄養学科2年生のうち「栄養指導実習 I 1組」を履修した24名、「栄養指導実習 I 2組」を履修した25名の計49名とした。

2.2. 調査概要

プレゼンテーション発表において、記名式学生相互評価と無記名式学生相互評価を実施した。「栄養指導実習 I 1組」では、学生を8班(1班3名)にわけて、発表評価表に記名させない無記名式学生相互評価をお

〔食物栄養学〕
〔実践報告〕

こない、「栄養指導実習 I 2組」では、学生を8班（1班 3～4名）にわけて発表評価表に記名させる記名式学生相互評価を実施した。同時に、教員も全班的プレゼンテーション発表内容を評価することとした。

評価の視点については、ヒューマンケアチームアプローチ演習担当教員チームら²⁾のものを参考に、①プレゼンテーションの準備状況（「問題点のまとめ方」「根拠資料の有無」）、②プレゼンテーションの内容（「解決

策の有無」「最善策の提示」「対策の評価」）、③プレゼンテーションのスキル（「発表資料について（図と表など）」「発表のスライド（文字・レイアウト）」「発表の構成（説明の順番）」「発表（声の大きさ）」の3つとして、それぞれ大変良い（4点）、良い（3点）、悪い（2点）、とても悪い（1点）の4段階とした。また、相互評価の質をあげるために、ルーブリックを作成した（表1）。

表1 2023年度版プレゼンテーション相互評価のためのルーブリック

評価の視点		4点	3点	2点	1点
プレゼンテーションの準備状況	問題点のまとめ方	問題点を適切にまとめている	問題点をまとめている	問題点をまとめているが、要点がわかりにくい	問題点をまとめていない
	根拠資料の有無	根拠となる資料を準備している	根拠となる資料が部分的にある	根拠となる資料がほとんどない	根拠となる資料がない
プレゼンテーションの内容	解決策の有無	複数の解決策を説明している	解決策を説明している	解決策を説明しているが、わかりにくい	解決策がない
	最善策の提示	最善策を選んだ理由を適切にまとめている	最善策を選んだ理由が不十分	最善策を提示しているが、理由がない	最善策がない
	対策の評価	対策に対して適切な評価を考えている	対策に対して評価を考えている	評価は考えている	評価を考えていない
プレゼンテーションのスキル	発表資料について（図と表など）	とてもわかりやすい	わかりやすい	わかりにくい	とてもわかりにくい
	発表のスライド（文字・レイアウト）	とても見やすい	見やすい	見にくい	とても見にくい
	発表の構成（説明の順番）	とても工夫している	工夫している	工夫していない	とても工夫していない
	発表（声の大きさ）	とても聞き取りやすい	聞き取りやすい	聞き取りにくい	とても聞き取りにくい

2.3. 実習の流れ及び調査時期

無記名式学生相互評価、記名式学生相互評価ともにテーマは「食塩」とし、3回の実習でプレゼンテーションの準備をさせた。

発表内容（①ライフステージ②現状（課題・問題）③要因分析（原因）④対策⑤評価）については考えやすいようにワークシートを配布し、評価の視点（表1）についてはプレゼンテーションの準備に取り組ませる前に説明を行うとともに、プレゼンテーション作成中にも適宜説明を行った。

調査は、無記名式学生相互評価を6月14日（水）、記名式学生相互評価を6月9日（金）に実施した。

2.4. 分析方法

記名式学生相互評価と無記名式学生相互評価のそれぞれで、学生評価平均値と教員評価に差があるかどうか検定を行った。

3. 結果及び考察

3.1. プレゼンテーションの評価

「栄養指導実習 I 1組」では調査対象24名のうち当日の欠席が1名、回答の不備が2名みられたため有効回答21名（有効回答率87.5%）、「栄養指導実習 I 1組」では調査対象25名のうち回答の不備が1名みら

れたため有効回答24名（有効回答率96.0%）。評価用紙にルーブリック評価を記載、発表後に採点する時間などを設けたにもかかわらず評価に不備がみられた。記名式であれば評価用紙回収後に不備の訂正を行わせることができるが、無記名式ではできないため、評価用紙回収後の訂正は本研究では行われなかった。このことから、1班発表毎に採点ができたかを確認する、もしくは1班ごとの評価用紙を作成し回収時にすぐ不備を指摘できるような工夫をする必要があると推察された。

図1に相互評価の得点分布を示した。3つの視点ともに「良い（3点）」を中心に評価が分布していたことから、ルーブリックが学生の評価行動の標準化に効果があったと考えられた。このことから、ヒューマンケアチームアプローチ演習担当教員チームら²⁾が導入予定としている相互評価による成績評価についても短大生の実習においても導入できる可能性が示唆された。

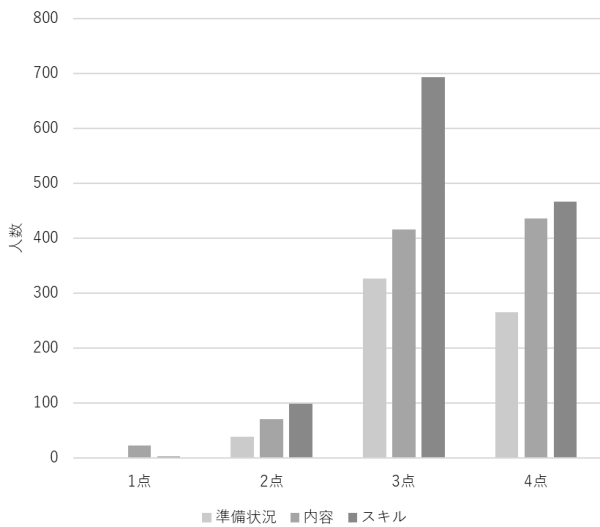


図1 プレゼンテーションの評価

3.2. 教員評価と記名式学生評価の比較

各班に対しての評価をそれぞれ見てみると、無記名式学生評価においては1～8班で1班を除きすべての班で教員評価の点数より高い傾向が見られた(表2)。記名式学生評価と教員評価に差があるかt検定を行ったところ、有意な差がみられた($p < 0.05$)。杉本は、学生同士の評価において記名式の学生評価は、相手に遠慮をして評価が甘くなる傾向にあると報告している³⁾。本研究では、ルーブリックを作成したものの同様の結果が得られたことから、ルーブリックを作成したとしても記名式学生評価では学生は教員よりも採点が甘くなることが明らかとなった。

表2 教員評価と記名式学生評価の比較

	単位(点)			
	教員評価 平均 (n=2)	記名式 学生評価平均 (n=24)	差	t検定
1班	31.5	31.1	0.4	
2班	30.0	31.3	-1.3	
3班	28.5	28.7	-0.2	
4班	30.0	31.4	-1.4	
5班	23.0	30.0	-7.0	p < 0.05
6班	28.5	31.1	-2.6	
7班	26.0	30.4	-4.4	
8班	25.5	30.3	-4.8	
平均値	27.9	30.5	-2.7	

3.3. 教員評価と無記名式学生評価の比較

各班に対しての評価をそれぞれ見てみると、無記名式学生評価においては1～8班で6班を除きすべての班

で教員評価の点数より高い傾向が見られた(表3)。記名式学生評価と教員評価に差があるかt検定を行ったところ、有意な差はみられなかった。

表3 教員評価と無記名式学生評価の比較

	単位(点)			
	教員評価 平均 (n=2)	無記名式 学生評価平均 (n=24)	差	t検定
1班	25.0	28.7	-3.7	
2班	25.0	28.3	-3.3	
3班	27.0	27.5	-0.5	
4班	28.5	30.5	-2.0	
5班	23.5	26.1	-2.6	n.s.※
6班	29.5	29.1	0.4	
7班	25.0	29.9	-4.9	
8班	30.0	31.1	-1.1	
平均値	26.7	28.9	-2.2	

※n.s.=「有意差なし」

3.4. 記名の有無が評価に与える影響

記名式学生評価平均値30.5点(表2)と、無記名式学生評価平均値28.9点(表3)を比較すると、記名式学生評価平均値が1.6点高いという結果が得られた。このことから、ルーブリックを作成していたとしても記名式では採点が甘くなる傾向が示唆された。

また、教員評価との差を比較してみると記名式学生評価では-2.7点、無記名式学生評価で-2.2点であったことから、無記名式学生評価の方が教員評価に近くなることが考えられた。

最後に、ルーブリックの作成をしていけば記名の有無は評価に影響しないと考えていたが、ルーブリックを示していても記名では評価が甘くなるという結果が得られた。藤原ら⁴⁾が評価する相手も評価者を評価する場合は、そうでない場合に比べて、評価が甘くなる場合がある(お互い様効果)と報告されていることから、無記名であっても互いに評価し合うという意識が今回の結果に影響している可能性が考えられた。だが、杉本が行った調査⁵⁾でピア・レビューの回数を重ねるごとに受講学生に発信力が身につくのと同時に、評価すべきポイントを理解することで採点力も身につけたことが示唆されている。そのため、「栄養指導実習Ⅰ」では複数回プレゼンテーションをする機会があることからプレゼンテーションの評価を複数回していくことによる学生評価と教員評価が近づいていくのか検討を行う。それと同時に、栄養指導実習で行う「媒体をもちいた食育の実践」「調理のデモンストレーション」に対して

も学生相互評価が導入できるか検討していきたいと考えている。

4. まとめ

本研究では、栄養士養成施設における専門科目である栄養指導実習Ⅰで行うプレゼンテーションにおいて学生相互評価の導入を試みた。プレゼンテーションを、相互評価のルーブリックを作成し、教員と学生が評価することとし学生同士で評価するにあたっては、学生同士で誰が誰を評価するのか明らかにした記名式学生相互評価と誰が誰を評価したのかが分からない無記名式学生相互評価を実施し、それぞれの結果を比較・考察を行った。

調査の結果、評価用紙にルーブリック評価を記載、発表後に採点する時間などを設けたにもかかわらず評価に不備がみられた。そのため評価用紙の工夫または提出方法の工夫を検討する必要がある。プレゼンテーションの評価において、ルーブリックを作成したことにより3つの視点ともに「良い(3点)」を中心に評価が分布していたことから、ルーブリックが学生の評価行動の標準化に効果があったと考えられた。

評価用紙への記名の有無では、記名式学生評価で教員評価と比較し有意に高いという結果が得られた。そのため、評価行動の標準化にはルーブリックが重要であること、教員の評価に近づけるためには無記名式学生相互評価が有用であることが示唆された。

今後は、無記名式においても教員評価より採点が甘くなる傾向がみられたことから、プレゼンテーションの評価を複数回していくことによる学生評価と教員評価が近づいていくのか検討を行う。さらに栄養指導実習で行う「媒体をもちいた食育の実践」「調理のデモンストラクション」などについても相互評価が導入できるか検討していく。

5. 参考文献

- 1) 杉本亜由美：キャリア教育科目におけるピア・レビューに関する調査報告, *International Journal of Human Culture Studies* 2020 (30), pp 21-27, 2020.
- 2) ヒューマンケアチームアプローチ演習担当教員チーム：山口県立大学学術情報 10, pp7-13, 2017.
- 3) 杉本亜由美：日本語発表練習における効果的なフィードバックの研究, *International Journal of Human Culture Studies* 2019 (29), pp38-42, 2019.
- 4) 藤原康宏, 大西 仁, 加藤 浩：公平な相互評価のための評価支援システムの開発と評価, 学習成果物を相互評価する場合に評価者の選択で生じる「お互い様効果」, *日本教育工学会論文誌* 31 (2), pp125-134, 2007.
- 5) 杉本亜由美：日本語発表練習におけるピア・レビューに関する調査報告, *International Journal of Human Culture Studies* 2019 (29), pp610-615, 2019.